

# 大津の文化財調査中！—未指定文化財調査速報展示—

令和5年6月9日（金）～令和5年7月2日（日）

じぞうぼさつりゅうぞう

## 1. 地藏菩薩立像

木造古色 1 軀 平安時代（10世紀） 坂本・大正寺蔵

本堂の脇壇に伝来しました。広葉樹の一木から彫出し、内刳はありません。

着衣には翻波式衣文が見られ、お腹から膝の下にかけてのY字型の衣文は9世紀頃に多く見られます。ただ、彫りは浅く穏やかで、翻波式衣文もかなりあいまいです。9世紀よりは少し後の10世紀前半頃の作でしょう。また、現状では右手に錫杖を持ちますが（展示はしていません）、制作された当初は持っていなかったと思われます。

まぶたを刻まず、目を眼球のふくらみだけで表す点や、右腕にかかる覆肩衣が大袖のように表現される点は珍しく、神像との関わりも想像されます。頭を大きく左に振る点も特徴的です。比叡山のお膝元・坂本に伝わったことから、元々は比叡山関係の仏像だったのかもしれない。

あみだによらいざぞう

## 2. 阿弥陀如来坐像

木造漆箔 1 軀 鎌倉～南北朝時代（14世紀） 坂本・大正寺蔵

本堂脇壇に伝来した阿弥陀如来坐像で、伝来は不明です。

着衣を見ると、両腕にかかる衣（袖のような部分）が、地面の近くで不自然に途切れています。造られた当初は、衣が台座に長く垂れる「法衣垂下」と呼ばれる形式だった可能性があります。この形式は、中国・宋代の美術を取り入れたもので、仏像彫刻としては、14世紀以降、関東を中心に流行したとされています。像底が最近修理されており、構造を知ることができないのは惜しいですが、本像は、数少ない関東以外の地域における仏像となる可能性があり、貴重です。

極端な猫背で、頭が前に出る姿勢などから、14世紀前半頃の作と思われます。

あみだによらいざぞう

## 3. 阿弥陀如来坐像

木造漆箔 1 軀 鎌倉時代（13世紀） 下坂本・西光寺蔵

西光寺本尊の阿弥陀如来坐像です。肉髻は低く、頭部はやや鉢が張っており、髪際がゆるやかに波打ちます。

近年の修理によって、本来の彫刻面が分かりづらくなっており、面部などはかなり直されているようです。ただ、側面から見ると胸や腹の張りが感じられ、小さな像ながら迫力があります。また、耳の形状といった細かな部分を丁寧に表すところも見どころです。

低い肉髻や波打つ髪際、膝などに見られるY字状の衣文は13世紀頃から多くなります。よって、鎌倉時代の仏像である可能性があります。

じぞうぼさつりゅうぞう

#### 4. 地蔵菩薩立像

木造古色 1 軀 平安時代 (12世紀) 三井寺町・大練寺蔵

大練寺本堂の脇壇に伝来しました。

頭を耳の上あたりで切断して再び接合しており、頭部内に文書などの納入品がある可能性があります。また、像の背面には元禄 4 年 (1691) の銘文があり、「山王院圓智法印」「智樂禪師」が本像を再興、寄進したと記されています。「圓智」「智樂」の詳細は不明ですが、「山王院」とあることからすれば、園城寺や延暦寺と関係する僧侶なのかもしれません。

眠たげな表情、奥行きのない体軀、簡潔な衣文などから、12 世紀の制作と思われる。

じぞうぼさつざぞう

#### 5. 地蔵菩薩坐像

木造彩色 1 軀 鎌倉時代 (13世紀) 三井寺町・大練寺蔵

ご本尊の地蔵菩薩坐像です。曹洞宗の本尊は釈迦如来が多いのですが、大練寺では地蔵菩薩が祀られています。

胸のあたりをよく見ると、肉身と衣の間に隙間があり、別々に作られていることが分かります。この構造は、鎌倉時代にしばしば見られるものです。体側や脚部に細かく材を足し、左足を別に作る (現在は無くなっています) など、丁寧に造られています。

像の内部に、慶長 16 年 (1611) に園城寺僧「東圓坊重順」が修理したという墨書があり、大練寺と園城寺の深い関係性が窺えます。

しんしょうりゅうぞう

#### 6. 神将立像

木造彩色・截金 1 軀 鎌倉時代 (13~14世紀) 園城寺 (微妙寺) 蔵

園城寺五別所のひとつである微妙寺に伝来しました。左手を振り上げて右手を腰に当てる姿勢、赤色の肌、おでこに U 字のシワを刻み、口を大きく開けることなどが特徴としてあげられます。これらの点は、奈良・東大寺大仏殿が鎌倉時代に復興された時に造られた、いわゆる「大仏殿様四天王」のうち増長天と同様です。したがって、本像も「大仏殿様四天王」のうちの 1 軀と考えることができます。

やや胸を引いて頭を前に出す体勢は、1289 年制作の奈良・薬師寺増長天像に類似し、近い頃の制作と思われる。なお、彩色は一部塗り直しがあります。

ふじわらひでさとりゅうぞう

#### 7. 藤原秀郷立像

木造古色 1 軀 江戸時代 (17~19世紀) 瀬田・龍王宮秀郷社蔵

秀郷社のご神体である藤原秀郷の像です。社伝によれば、寛永 10 年 (1633) に秀郷社が遷座・修造された際、蒲生忠知がご神体を寄進したとされています。

立烏帽子に狩衣、指貫を着けて太刀、小刀を帯び、右手には扇、左手には弓を持つ姿です。秀郷は、瀬田唐橋に現れた大蛇に頼まれ、三上山に住む大百足を弓矢で成敗したという伝説があります。弓を持

つのはこの逸話によるものでしょう。また、この時の大蛇は瀬田川の龍神の化身とも言われ、秀郷と瀬田川の龍神をあわせて祀る当社の由緒が思い起こされます。

りゅうおうぐうひでさとしや

## ※瀬田・龍王宮秀郷社の由緒

龍王宮秀郷社は、瀬田川にかかる唐橋の東詰にあります。瀬田川の龍神を祀る龍王宮と、依藤太の名でも有名な平安時代の武将・藤原秀郷を祭神とする秀郷社からなる神社です。

龍王宮は、唐橋架け替えの際に、川の龍神を遷座する社とされます。昭和50年(1975)の架け替えの時も、まず龍王宮の玉垣などを修理し、龍神を川から神社へと遷座した後に工事が行われました。

もう一方の秀郷社は、寛永10年(1633)に蒲生忠知(1604~1634)が修理・造営したものだと言います。唐橋の近隣に蒲生氏の先祖とされる秀郷を祀る舎人堂があり、それを知った忠知が龍王宮の隣に遷したそうです。

龍王宮秀郷社の隣には、同じく蒲生一族が建立したと伝わる浄土宗・雲住寺があり、唐橋周辺と蒲生氏とのつながりが想定されます。

ししがしら

## 8. 獅子頭

### 木造彩色 1頭 室町時代(15~16世紀) 逢坂・関蟬丸神社下社蔵

琵琶の名手として知られる蟬丸を合祀し、芸能の神として信仰を集める関蟬丸神社下社に伝来した獅子頭です。獅子頭は、伎楽や舞楽といった祭礼の時に、獅子舞で使用されました。

少し角張った平たい骨格、太いロープのような眉など、おおらかさが印象的です。一方で、表面の起伏にあわせて内割りをし、扱いやすいように軽量化するなど細かな工夫もしています。

扁平で角張った形状や、やや簡略な表現から、制作はおそらく室町時代までさかのぼると思われる。中世の祭礼文化の一端を窺うことができる、貴重な資料です。

ほうべんほっしんそんぞう

## 9. 方便法身尊像

### 絹本着色 1幅 大永3年(1523) 堂・教誓寺蔵

浄土真宗では、阿弥陀如来の絵像のことを「方便法身尊像」といいます。真宗において本来は実体のないものと考えられていた阿弥陀如来ですが、人々を救済するため仮に具体的な姿をとることから「方便」と呼ぶようになりました。中央に阿弥陀を描き、その周囲に48条の光明を表す姿で、もともとは教誓寺の本尊だったのでしょう。なお、両手の親指と人差し指で輪を作る印相は来迎印と言いますが、浄土真宗では「攝取不捨印」と呼び換えます。大永3年の裏書を有し、制作年代の明らかな基準作として重要です。

現在、裏書はとても傷んでおり、文字が読みにくいですが、「方便法身尊/村/物也/永三年癸未六月廿/勝口口/栗太郡田上杣庄」という文字は確認できます。また、大正15年(1926)に出版された『栗太郡志』に、「方便法身尊像/大谷本願寺釋實如(花押)/大永三年癸未六月廿五日/勝林坊口口(門徒カ)江州栗太郡田上庄堂村惣道場物也」と本作の裏書が紹介されており、当初の内容を知ることができます。

この裏書で注目されるのは「勝林坊」という語です。勝林坊とは、真宗木辺派本山である野洲・錦織寺の住職を務めた勝恵（1475～1557）のことを指すと考えられます。もともと、木辺派は下総国横曾根（現・茨城県常総市）の横曾根門徒の流れを汲み、本願寺とは異なる門流でした。しかし、勝恵は、明応2年（1493）に多くの末寺とともに錦織寺から本願寺に移りました。この時に勝恵に従って本願寺に移った寺々を「勝林坊門徒」と呼びます。したがって、「勝林坊」の裏書を持つ方便法身尊像が残る教誓寺は、本来は錦織寺の末寺だったものの、勝恵に従って本願寺の末寺に変わった可能性があります。

教誓寺・方便法身尊像は、かつて堂に錦織寺の教化が及んでいたことを想像させる貴重な史料と言えるでしょう。

じゅうにてんぞう

## 10. 十二天像

絹本着色 4幅（全12幅のうち） 室町時代（16世紀） 田上・不動寺蔵

大津市田上の不動寺に伝来した十二天像です。十二天は密教の修法をする際の守護神として、堂内に懸けられます。

箱には明和元年（1764）と寛政9年（1797）の修理銘が記されており、明和元年の修理銘には「下太神講」と見えることから、江戸時代には今の不動寺に伝来したことがうかがえます。各尊の表情や細部の描きこみ、装身具の彩色などから、室町時代の後半に描かれたと考えられます。やや絵具の剥落や絹の傷み等は見受けられますが、12幅が全て伝わっており、地域の歴史がわかるものとしても貴重な作例です。

じぞうぼさつぞう

## 11. 地藏菩薩像

絹本着色 1幅 室町時代（15世紀） 京町・善通寺蔵

波間に立つ岩座の上の蓮台に座る地藏菩薩を描いています。両手で宝珠を持ち、地藏の右手側に錫杖が浮いているこの姿は、「延命地藏」として知られています。

目の細かい絹が用いられ、各部の彩色も丁寧に塗られており、金泥を多用した文様も細かく施されています。また、岩には群青や緑青の他、金泥も使用されています。以上の彩色方法から、制作時期としては室町時代の前半頃が想定できます。

なお、画面右下には壺印が押されていますが、印のつき方が悪く、判読ができません。